

Donne の ‘Lamentations of Jeremy’*

加藤 芳子

(1) 序

John Donne¹ が Sir Philip Sidney² から何がしかの影響を受けている事は否定されがちであった。しかし伝記、蔵書リスト、詩形等の角度から調べてみると、確かに影響がある事は否定できない事実となった³。決定的な証拠となったのは、Donne の宗教詩の形式であった。Donne はその ‘La Corona’ の重要な部分に於て、Sidney が *Astrophil and Stella* の中で好んで多用したタイプの Petrarchan sonnet の形式を借用しているのである⁴。

Renaissance は宗教改革の時代でもあり、英国の作家達は競って散文や韻文で聖書の英訳を試みたのであるが、British Library の General Catalogue で調べてみると、その対象となったのは殆どが詩編であった。Donne は ‘Upon the Translation of the Psalmes by Sir Philip Sydney, and the Countesse of Pembroke his Sister’⁵ の中で、当時英国に於て優勢だった Sternhold 及び Hopkins⁶ による詩編の paraphrase (即ち Old Version) に対する不満を表明し、Sidney の詩編の paraphrase の方を、特に多用な metre を用いた点で、高く評価しているのである。

聖書の哀歌を paraphrase した、Donne の ‘Lamentations of Jeremy’ という詩は、この ‘Upon the Translation of the Psalmes’ と関係があるかもしれないと、Dame Helen Gardner は述べている⁷。しかし、Donne の哀歌をそのソースと比較し、彼の paraphrase の特徴を詳細に検討する事は、余りなされてはいないのである。

そこで本論では、Donne の哀歌の paraphrase を、Drayton の版⁸ や Sternhold-Hopkins の Old Version (詩編のみ)、Tremellius 版⁹、Vulgate 版¹⁰、

Authorized Version¹¹ と比較し、Donne の求めたものが、フランスの Marot や B ze¹²、英国の Sidney 等の流れを汲むものである事を辿り、聖書の paraphrase という厳しい制約の中でこそ発揮された Donne らしい特徴を論じてみようと思う¹³。

(2) 聖書の哀歌

哀歌は、ラテン語版聖書のエレミア書の後にあり、5つの章から成っている。

哀歌の著者はエレミアではないと言われる。そのテーマは B.C.586 年にエルサレムとユダを襲った悲劇と受難であり、罪と罰、神に対する希望や信頼である。

哀歌の第 1・2・4 章は葬いの歌、第 3 章は個人的悲しみの歌、最後の第 5 章は一般的な受難の歌である。第 3 章は個人的な調子が強く、詩編(例えば 26、31、35、38、40、55 篇)を想起させると言われる。この章は、神の全能、慈悲、正義、罪と罰の様な、神学上重要な問題を取扱っている。

(3) 第 5 章の比較

Drayton は聖書の哀歌は第 5 章しか paraphrase していないので、先ずこの第 5 章だけを、Old Version、Tremellius、Authorized Version、そして Donne の paraphrase と比較して、その相異点を把握し、次に他の 4 章も比較してみる。

Drayton の哀歌は、‘The Prayer of Jeremiah, bewailing the Captivity of the People. In the Fifth Chapter of his Lamentations’ という題で、*The Harmonie of the Church* の中に収められている。

Drayton は聖書の哀歌第 5 章を iambic heptameter つまり fourteeners の、連形式をとらない、42 行にわたる韻文で paraphrase した。各行は couplet で押韻している。

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

第 5 章の冒頭の 4 行を見てみよう。

Call unto mind, O mighty Lord,
the wrongs we daily take! a₇
Consider and behold the same,
for Thy great mercy's sake. a₇
Our lands and our inheritance
mere strangers do possess, b₇
The aliens in our house dwell,
and we without redress. b₇

(Drayton, V.1-4)

Sternhold と Hopkins も Old Version に於て Drayton と同様に Common Metre と呼ばれるこの fourteeners couplet を用いている。彼らは詩編を paraphrase しているので、本論の哀歌の比較には直接関係はないが、Donne がこれに反発して、Sidney の詩編の versification をむしろ評価している点で、無視はできない。そこには boldness, simplicity, そして sublimity がある。Old Version の Psalm 第 1 篇の 1-2 節を引用してみよう。

The man is blest that hath not lent
to wicked men his ear, a₇
Nor led his life as sinners do,
not sat in scorners' chair; a₇
But in the law of God the Lord
doth set his whole delight, b₇
And in the same doth exercise
himself both day and night. b₇

(Old Version, Psalm I.1-2)

ラテン語の Tremellius 版の哀歌の第 5 章と、英語の Authorized Version の同部分とを比較すると、前者が後者のソースの 1 つである事がわかる。両者共散文であり、1 つの文章あるいは節が、コンマやコロンの句読点によって、

2つの部分に分けられている点は共通している。

Tremellius 版の第5章の冒頭は、次の様になっている。

Recordare Jehova quid sit nobis,
intuere & aspice opprobrium nostrum.
Possessio nostra aversa est ad extraneos,
domus nostrae ad alienigenas.
Pupilli sumus ac nullo patre,
matres nostrae tanquam viduae.
Aguas nostras “pecunia bibimus,
ligna nostra pretio obveniunt. (Tremellius, V.1-4)

欽定訳の同部分を見ると、以下の様になっている。(下線部筆者。)

Remember, O Lord, what is come upon us:
consider, and behold our reproach.
Our inheritance is turned to strangers,
our houses to aliens.
We are orphans and fatherless,
our mothers are as widows.
We have drunken our water for money;
our wood is sold unto us. (A.V., V.1-4)

ところが、Donne の哀歌はそう単純ではない。同第5章の第1-4節を引用してみよう。

Remember, O Lord, what is fallen on us; a₅
See, and marke how we are reproached thus, a₅
For unto strangers our possession b₄
Is turn'd, our houses unto Aliens gone, b₅

Our mothers are become as widowes, wee c₅

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

As Orphans all, and without father be; c₅
Waters which are our owne, wee drinke, and pay, d₄
And upon our owne wood a price they lay. d₅

(Donne, V.1-4)

Donne の場合は、少々複雑に入り組んでいる。同じ第 5 章の第 1 節の第 1 行目は iambic pentameter で、そして第 1 節の 1 行目と第 2 節の 2 行は iambic であるが、第 1 節の 2 行目は trochaic で書かれている。第 1 節の 2 行と第 2 節の 2 行目は pentameter だが、第 2 節の 1 行目は tetrameter で書かれており、各節の 1 行目には feminine ending がある。

以上の 5 種類の版を簡単に比較してみると、versification に関する限り Donne は、Common Metre と呼ばれた長い fourteeners couplets を常に用いた、Drayton や Sternhold-Hopkins の Old Version の paraphrase には、追随してはいない事が明らかである。

彼らに反して、フランスの Marot と B  ze は、その詩編の paraphrase に際して多種多様な metre を用い、これが Sidney の詩編の paraphrase に影響を与えた。そして Donne は、これに影響を受けて、その賞讃の詩 'Upon the Translation of the Psalmes' の中で、次の様に詠っているのである。

That I must not rejoyce as I would doe
When I behold that these Psalmes are become
So well attyr'd abroad, so ill at home,
So well in Chambers, in thy Church so ill,
As I can scarce call that reform'd untill
This be reform'd; (ll.36-41)
So though some have, some may some Psalmes translate,
We thy Sydnean Psalmes shall celebrate, (ll.49-50)

そして Gardner は、Donne が聖書の本来の rhythm を生かした metre を選んでいる点で、彼が当時の大多数の paraphrase よりも優れていると述べている¹⁴。

Drayton の哀歌は、上記の引用の中でも、14 音節という最長の詩行を持っており、そこには dignity がある。各行は長く、中央で息をつぐとすれば、上記の様に、2 行に分ける事もできる。Tremellius 版と欽定訳は散文訳で各文は長い。上記の様に各文を詩の様に 2 行に分けると、全体として各行の長さは、Donne のそれに共通しているようにも見える。

Diction について言えば、Donne は基本的に欽定訳に従ったように思われる。彼は大体に於て次の様に欽定訳と同様の key words を用いている。例えば、下線 1 本を施してみたように、この第 5 章第 1 節では、“Remember, O Lord”、“reproach”、“strangers”、“houses”、“aliens”等である。そして下線 2 本を施してみたように、彼は “come” を “fallen” に変え、“consider” を “See” に、“behold” を “marke” に、“inheritance” を “possession” にと変えているのであるが、Donne の paraphrase は、欽定訳よりも diction は simple で、context の表現はもっと concrete なものとなっている。Donne の場合は、“consider” や “behold” よりも “See” とか “marke” という動詞を選んでいる点で、彼らよりもより simple で colloquial に聞こえると言えよう。

(4) 第 1・2 章の比較

Donne は聖書の哀歌の 5 章全てを、英語の韻文に paraphrase した。しかし彼は、常に同じ詩形で paraphrase した訳ではなく、下の表の様に、散文訳の Tremellius 版や欽定訳と比べると、かなり変えているのである。

章	Tremellius 版	欽定訳	Donne
1	22 節	22 節	4 行×22 節
2	22 節	22 節	4 行×22 節
3	66 節	66 節	2 行×2 節×23 連
4	22 節	22 節	4 行×20 連
5	22 節	22 節	2 行×2 節×11 連

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

欽定訳には、diction や syntax のみならず、文章の長さや punctuation に於ても、Tremellius 版と共通するところが多々ある。概して Donne は diction に関しては、Tremellius 版と欽定訳の両方に共通する diction に従っている様である。しかし彼は、原典の syntax を忠実に再現しようとする時には、或いはその節自体に何か simple で明確な意味を与えようとする時には、Tremellius 版の diction だけを選んでいるのかもしれない。

Vulgate 版と Tremellius 版、欽定訳、そして Donne の哀歌の第 1 章の第 1 節—第 2 節を比較してみよう。

Quomodo sedet sola

civitas plena populo!

Facta est quasi vidua

domina gentinum;

princeps provinciarum

facta est sub tributo.

Plorans plorat in nocte,

et lacrimae eius in maxillis eius;

non est qui consoletur eam

ex omnibus caris eius:

omnes amici eius spreverunt eam

et facti sunt ei inimici.

(Vulgate, I.1-2)

Quomodo desidet solitaria

civitas amplissima populo,

similis est viduae?

amplissima inter provincias

quomodo est tributaria?

Quomodo plane flet noctu,

& lachrymae ejus descendunt in maxillas ejus,

nullo eam confolante
ex omnibus amantibus ejus?
omnes amici ejus perfidè agunt contra eam,
effecti in eam inimici? (Tremellius, I.1-2)

How doth the city sit solitary, that was full of people! how is she
become as a widow! she that was great among the nations, and princess
among the provinces, how is she become tributary!

She weepeth sore in the night, and her tears are on her cheeks: among
all her lovers she hath none to comfort her: all her friends have dealt
treacherously with her, they are become her enemies. (A.V., I.1-2)

How sits this citie, late most populous,
Thus solitary, and like a widow thus!
Amplest of Nations, Queene of Provinces
She was, who now thus tributary is!

Still in the night shee weepes, and her teares fall
Downe by her cheekes along, and none of all
Her lovers comfort her; Perfidiously

Her friends have dealt, and now are enemye. (Donne, I.1-2)

例えば、次の言葉は、Vulgate 版、Tremellius 版、欽定訳、Donne の 4 版全
てに共通している。

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

	Vulgate	A.V.	Tremellius	Donne
I.1	civitas	city	civitas	citie
I.1	populo	people	populo	populous
I.1	sola	solitary	solitaria	solitary
I.1	tributo	tributary	tributaria	tributary

しかし、次の言葉は、Tremellius 版と Donne に共通しているが、Vulgate 版及び欽定訳とは異なる例である。

	Vulgate	A.V.	Tremellius	Donne
I.1	plena	full	amplissima 最上級	most populous 最上級
I.1	該当する言葉なし	great	amplissima 最上級	Amplest 最上級
I.2	動詞なし	are	descendent 動詞	fall 動詞
I.2	spreverunt 動詞	treacherously	perfidè	Perfidiously
I.5	in securitate	prosper	tranquille agunt	live at peace

Donne は、原典の意味や syntax を損なわない様にするために、特に動詞等に関して、Tremellius に従って、適切な言葉を注意深く選んだようである。

Donne は哀歌を基本的には iambic pentameter で書いた。各行は aabb, ccdd, 等と押韻して couplet となり、連形式をとっている。しかし彼は、Drayton や Old Version の heptameter、つまり fourteeners を模倣しなかった。そして哀歌の paraphrase の直前に、彼が 'Upon the Translation of the Psalmes' に於ても同様に、iambic pentameter で aabbccdd …… というように、couplet として押韻していく手法を実践していたという事実は、注目に値する。彼は哀歌に於て、各連が聖書本来のリズムを留めるように、連形式をとって書いている。

例えば、第1章と第2章の各節は、基本的に聖書本来の punctuation に従って、4行ずつに分けられている。しかし彼は、次の第3章に於ては、異なった詩形を用いている。

(5) 第3章の比較

Tremellius 版哀歌の第3章は、散文訳で66節ある。各節は2つの部分に分かれており、その長さは、哀歌の全5章の中でも最も短く、第5章のそれと類似している。

Donne は、Tremellius 版の第3章の66節を、23の連に分けた。各連は4行より成り、各々3つの節に相当しているので、この第3章は、その前の第1・2章と同様の連形式を持つことができている。しかも、前の2章と同様に、iambic pentameter の couplets で作られている。

第3哀歌は、神学上非常に重要な問題を取扱っている。それは、神の全能(37-39節)や神の恩寵(31-33節)、正義(34-36節)等で、全て Donne の好むテーマである。それは、罪と罰の関係を、つまり、いかなる人間の災いも、その原因は、神の掟に対する人間の不服従にあるという事を、物語っている。(40-51節)。それは又、復讐についても語っている(52-66節)。この第3章は、個人的な調子が非常に強く、聖書の詩編を想起させる程である。罪に対する神の罰に関する嘆きの後には、神の恩寵、希望(20-26節)に対する、完全な信頼というものを示す、重要な部分が来ている。

Donne は、1つの節を短い1行ないし2行で作し、常に simple で concrete な言葉を選ぼうとしている。Gardner も指摘している様に、Donne は特に動詞それ自体、或いは動詞の時制を、入念に選んでいるように思われる。その結果彼は、Vulgate 版ではなくて、Tremellius 版の本来の意味と形式とを、欽定訳よりも、もっと明確で率直に伝える事が出来ている。従ってここでは、Donne と Tremellius 版とを比較するよりもむしろ、欽定訳と Donne とを比較して、その違いを明らかにし、Donne の特徴をより明確にしたいと思う。

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

欽定訳の第3章第20節は、散文で、次の様に長い1つの文章となっている。

My soul hath them still in remembrance,
and is humbled in me. (A.V., III.20)

Donne はこれを、iambic pentameter、つまり、たった10音節の、はるかに短い1文章にしている。その結果これは、1息で読めるし、理解もしやすいものとなっている。

My soul is humbled in remembering this; (Donne, III.20)

ここで Donne は、"remembering" という動詞の形を選ぶ事により、文章をより簡潔なものにする事に成功している。

次の節は、この第3章の冒頭にある長々とした嘆きの後で、初めて、作家の神への信頼や希望を示している。欽定訳は、次の様になっている。

This I recall to my mind,
therefore have I hope. (A.V., III.21)

Donne はこれを、もっと短い文章に変えている。そして彼の特徴は、次の様に、適切な動詞の選択にあるように思われる。

My heart considers, therefore, hope there is. (Donne, III.21)

Donne は前半を、主語と述語動詞のみの simple な syntax に変えているだけではない。「私の心が考えるからこそ、そこに希望があるのだ」という Donne の論法は、欽定訳の漠然とした表現とは違い、はるかに積極的な主体的姿勢が見られる。欽定訳が "have" 動詞を使い、Vulgate 版は "ideo sperabo" とあるように、"hope" に相当する動詞を使っているのに対して、Donne は、"is" という be 動詞で済ませている。

欽定訳の第22節は、次の様になっている。

It is of the Lord's mercies that we are not consumed, because his
compassions fail not. (A.V., III.22)

しかし Donne はこれを、もっと口語的で明確な表現に変えようとしている。

'Tis Gods great mercy we' are not utterly
Consum'd, for his compassions do not die; (Donne, III.22)

Donne が入れた “great” とか “utterly” というような言葉は、神の “mercy” の偉大さや確実さを強調している。そして “fail” という言葉が消極的な表現であるのに反して、“die” という動詞は、より強烈である。

第 23 節は、そもそも非常に詩的なところである。しかし欽定訳は散文的であり、以下の様に、本来の imagery を若干失っている。

They are new every morning:

great is thy faithfulness. (A.V., III.23)

Donne は以下の様に、この節を新しい連の 1 行目に置き、“For” という言葉でたたみかけるように書き始める事により、神の “compassions” の新鮮さを強調する事に成功している。

For every morning they renewed bee;

For great, O Lord, is thy fidelity. (Donne, III.23)

Donne は又、“renewed bee” という動詞を選ぶ事により、その意味をより definite なものにしてている。欽定訳の “They are new……” という淡々とした状況の説明よりは、神によって renew されるという Donne の表現の方が、誰が誰によって renew されるのか、その主体と客体の関係、及びその創造の作用が、より動きを持ち、real になっている。

次の第 24 節に於て Donne は、欽定訳の syntax を入念に変えている。ここでは、欽定訳の淡々とした叙述とは違い、「主は……私の分け前だからこそ……主にのみ私は希望を抱く」という、強靱な論理と信仰心が迫ってくる。

The Lord is my portion, saith my soul;

therefore will I hope in him. (A.V., III.24)

The Lord is, saith my Soule, my portion,

And therefore in him will I hope alone. (Donne, III.24)

又、第 25 節に於て、Donne の paraphrase は、以下の様に、欽定訳と比べると、より積極的で前向きの表現となっている。

The Lord is good unto them that wait for him,

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

to the soul that seeketh him. (A.V., III.25)

The Lord is good to them, who on him relie,

And to the Soule that seeks him earnestly. (Donne, III.25)

Donne の "relie" という動詞は、欽定訳の "wait" という消極的な動詞よりももっと前向きである。この積極性は、"earnestly" という副詞を入れたり、"relie" と押韻する事によっても、更に強調されている。

この信仰に於ける積極性は、Donne の近代性を示すものとも考えられるのであるが、次の第 26 節に於ける "hope" よりも "trust"、"wait" よりも "attend" という動詞の選び方や、"unto the end" という忍耐を強調する 1 節を加える事などにも、引き続き現れている。

It is good that a man should both hope and quietly wait for the salvation
of the Lord. (A.V., III.26)

It is both good to trust, and to attend

(The Lords salvation) unto the end: (Donne, III.26)

具体的で積極的な表現に対する Donne の好みは又、以下の様な節にも見出せる。そのテーマは神の恩寵であり、これは Donne にとって最も重要なテーマの 1 つである。

欽定訳は、次の様になっている。

For the Lord will cast off for ever:

But though he cause grief, yet

will he have compassion according

to the multitude of his mercies. (A.V., III.31-32)

Donne はこれを、次の様に paraphrase している。

For, not for ever doth the Lord forsake,

But when he' hath strucke with sadness, he doth take

Compassion, as his mercy' is infinite; (Donne, III.31-32)

Donne は、欽定訳の“cause”、“have”等の抽象的な動詞を、“strucke”、“take”等の、より具体的な動作を表す動詞に変えている。そして彼は、何故神が我々を決して見捨てる事がないのか、その理由を、“as” という接続詞を使ったり、“his mercy’ is infinite” という率直で簡潔な statement によって、論理的に明確なものにしている。

Gardner はその注釈の中で、Donne がその metre の選び方に於て秀れていると指摘しているに過ぎない。しかし彼が、diction、特に動詞の選び方に於て実に入念であり、聖書の本来の context の理解に於て正確であり、それをもっと具体的な意味を持つ、もっと率直な文章に作る際に、非常に論理的であるという事を指摘しておくべきであろう。

Donne の作詩法は、彼の神に対する信頼が、穏やかで消極的なものではなく、むしろ積極的で能動的なものであるという事を、明らかに反映しているのである。そして彼は、何か威厳はあるが抽象的な表現に満足したままでいる様には思われず、むしろ、常に聖書に基づいて、syntax や diction、logic、style 等に於て、純粹さや率直さ、簡潔さ等を追求する事に、最善を尽くしているのである。

(6) 第 4 章の比較

Tremellius 版哀歌の第 4 章は、punctuation からすると、基本的に 3 つの部分より成る、22 の節から成っている。それで各節は、第 3 章のそれよりも長い。第 1・2 章のそれよりは短いものとなっている。Donne は、各節の 1 つひとつの部分、3 行ずつの詩行で書いた。この章のテーマは、エルサレムの悲劇と、彼らの罪の嘆きである。ここには、Donne 特有の技法の好例が見られる。

欽定訳の哀歌の第 4 章第 19 節は、“persecutors” を次の様に描いている。

Our persecutors are swifter than the eagles of the heaven: they pursued us upon the mountains, they laid wait for us in the wilderness.

(A.V., IV.19)

Donne の 'Lamentations of Jeremy' (加藤芳子)

欽定訳では、本来の比喩の意味は、余り良く伝えられているとは言えない。ここでは鷲は、"pursued"、つまり追跡したり、"laid wait"、つまり待ち伏せしたりするものの image として使われているだけで、実際に鷲が飛びかかっている生々しい場面は、何も描かれてはいない。訳者は、何度となく彼らを素早く襲撃している 1 羽の鷲を生き生きと描くために、この比喩を使うべきではなかったか。さて、Donne はどう paraphrase しているだろうか。

Eagles of heaven are not so swift as they
Which follow us, o'r mountaine tops they flye

At us, and for us in the desert lye. (Donne, IV.19)

上述の 1 行目で Donne は、"persecutors" の鷲の様な素早さを強調する事を忘れてはいない。それから彼は、彼らの追跡そのものには力点を置かず、むしろ "fly/At" (飛びかかる) とか、"for us……lye" (我々を待ち伏せして潜む) 等という、具体的な動作を示す明確な表現を選ぶ事により、襲撃の行為そのものを、実に鮮やかに描いている。Donne は、dynamic でかつ鮮烈に表現できる動詞を選択する事に、成功しているのである。

(7) 第 5 章最終節の比較

哀歌の最後の第 5 章には 22 の節があり、各節は、基本的に punctuation により、2 つの部分に分かれている。各節は、第 3 章の節と同じ位短い。この章のテーマは、彼らが過去に犯した罪の告白と、神が彼らを永久に見捨てず、必ず救って下さるといふ、神に対する新たな希望と信頼である。

最後の第 20-22 節を比較してみると、Donne の哀歌の paraphrase 全体に共通する特徴が見出だされる。欽定訳は以下の様に抽象的であり、一貫して文語調の文体となっている。

Wherefore dost thou forget us for ever, and forsake us so long time?
Turn thou us into thee, O Lord, and we shall be turned; renew our days
as of old. (A.V., V.20-21)

そして最後の節は、怒れる神の立場を描いているのみである。

But thou hast utterly rejected us; thou art very wroth against us.

(A.V., V.22)

しかし Donne は、“in this misery” と加える事によって、見捨てられる状況をより real なものになっているし、“Restore us”とわずかな言葉で、何をして欲しいのかを具体的に表現してしまう。やはり鍵は動詞になっている。

Why should'st thou forget us eternally?

Or leave us thus long in this misery?

Restore us Lord to thee, that so we may

Returne, and as of old, renew our day. (Donne, V.20-21)

“Eternally”と“misery”の押韻からくるやるせなさは、次行冒頭の“Restore”と、更に次行の冒頭の“Returne”により鮮やかに切り返されているし、“may”と“day”の押韻には、祈願のむこうに希望が見えるようにという、入念な配慮がある。

Donne は、最後の節を別の連に分けて、しかも couplet に押韻している。そしてこれは、欽定訳の様に、神の“wroth”の単なる叙述、伝達ではなく、神に対する修辞疑問文として、余韻を残しつつ終わっている。

For oughtest thou, O Lord, despise us thus,

And to be utterly enrag'd at us? (Donne, V.22)

Donne は、聖書本来の context に従って、疑問文の形を選んでいるようである。

(8) 結論

Paraphrase の対象として、聖書ほど難しいものはないかもしれない。信仰上の理由で、勝手に内容を変える事は、許されないからである。聖書の哀歌を Donne は、聖書本来の syntax や詩行の長さ、リズム等を生かすような韻文に paraphrase した点で、成功しているように思われる。彼は基本的には、欽定訳聖書に従った様ではあるが、原典の context を忠実に伝えたい時には、Tremel-

lius 版に依ったようである。そして彼は、その paraphrase に concrete な意味を与え、神に対する積極的な姿勢を示すために、「動詞」を実に入念に選択した。この点に筆者は、Donne の近代性を見る。

彼は、論理的で理解しやすい、より plain かつ鮮明で colloquial な表現を追求した。その結果 Donne の哀歌は、その syntax や diction、logic、style に於て、purity、plainness、そして dignity を備えたものとなっている。聖書の paraphrase という最も厳しい制約の中でこそ、Donne は、その特徴を如何なく発揮したのである。

註

* 本稿は日本英文学会第 65 回大会 (於 東京大学) にて口頭発表したものに加筆修正を施したものである。

- 1 テキストは、J. Donne, *The Divine Poems* (Oxford: Clarendon Press, 1952). Ed. by H. Gardner.
- 2 テキストは、Sir P. Sidney, *The Poems* (Oxford: Clarendon Press, 1962). Ed. by W.A. Ringler, Jr.
- 3 Cf. H. Smith, "English Metrical Psalms in the Sixteenth Century and Their Literary Significance," *HLQ*, ix (1946), pp.249-271; 拙論「Sir Philip Sidney: *Astrophel and Stella* 試論」、『札幌大学教養部紀要』(札幌大学教養部、1979)、第 14 号、pp.33-46; 「Sidney と Donne — Donne's Library 及び伝記の側面から」、『北海道英語英文学』(日本英文学会北海道支部、1981)、第 26 号、pp.1-11; 「Sidney 訳 *Psalms* に於ける新たなる試み」、『札幌大学教養部紀要』(札幌大学教養部、1984)、第 25 号、pp.27-39; 「Sidney の *Psalms* と *Defence*」、『北海道英語英文学』(日本英文学会北海道支部、1987)、第 32 号、pp.11-21、等を参照されたし。
- 4 拙論「Donne の 'La Corona' と Sidney」、『北海道英語英文学』(日本英文

学会北海道支部、1991)、第36号、pp.13-23; 「Donneの‘La Corona’」、『札幌大学教養部紀要』(札幌大学教養部、1991)、第38号、pp.1-17、等を参照されたし。

- 5 J. Donne, ‘Upon the Translation of the Psalmes by Sir Philip Sydney, and the Countesse of Pembroke his Sister’, *The Divine Poems*, ll.36-41, 49-50.
- 6 テキストは、T. Sternhold and J. Hopkins, *The Whole Book of Psalms* (Oxford: University Press, 1852).
- 7 J. Donne, *The Divine Poems*, *op. cit.*, pp.103-104.
- 8 テキストは、M. Drayton, ‘The Prayer of Jeremiah, bewailing the Captivity of the People. In the Fifth Chapter of his Lamentations’, in *The Harmonie of the Church* (London: Richard Jones, 1591).
- 9 テキストは、I. Tremellio & F. Iunio, ‘Lamentationes Iirmejae’, *Testamenti Veteris Biblia Sacra* (Londini, 1580).
- 10 テキストは、‘Lamentationes’, *Nova Vulgata Bibliorum Sacrorum* (Libreria Editrice Vaticana, 1986).
- 11 テキストは、‘The Lamentaions of Jeremiah’, *The Holy Bible. Authorized King James Version* (Oxford: University Press).
- 12 テキストは、Clément Marot et Théodore de Bèze, *Les Psaumes* (Genève: Libraire Droz S.A., 1986).
- 13 ただし本論は、Donneのparaphraseの特徴を調べるのであって、聖書の原典とその無数の翻訳とを逐字比較考証する訳ではない。従って、Geneva Bibleその他、省略している版もある事をお断りしておく。
- 14 Gardner, *op. cit.*, p.104.